京城日報
昭和十年四月二十日印刷納本
昭和十年四月二十日發行
第三種郵便物認可
毎月二回十日・二十日發行
定價一部金拾錢
毎月前金拾錢
郵稅共
毎月前金拾五錢
毎月前金六十錢
同三圓五十錢
廣告料
黃金時代
廣告料
長期特別割引
電話
京城二〇〇番
振替京城三〇〇番
京城市南大門通
京城府南大門通
京城府南大門通
京城府

御兄弟御對面の際は 朝鮮式禮服を召される

一度李王殿下の思召で洋装と決つたが 方子妃殿下の絶つての御希望から變更

李世子、同妃兩殿下の御離城中最も取大な御禮は方子妃殿下が始めて御舅殿のお客様を遊ばす鄭殿の儀である鄭殿の儀は李殿下の思召により洋裝鄭殿と決定して居たが二十二日に至つて更に是を朝鮮式に賜られる事に御變更遊つて方子妃殿下にも他の幾多の御儀禮の際と同樣朝鮮式禮服を召される事に決定した旨殿下李殿から發表した右につき上林次官は謹

鄭殿の儀も朝鮮式にとは思つて居たが是は宮内省の諮詢を得る必要もあり一方王殿下の思召しと云ふ事も考へねばならず且御洋裝は御既儀當時醫師に拜謁せられた時の事であるから其當時と同じお委で御兄弟の御對面を遊ばすのが當然であると思ひ殊々鄭殿の儀は御洋裝と決定したのである、所が其後朝鮮式に賜るが好いと云ふ希望が時宜になつたので李王殿に於ても是を當見として熟慮し遂に決定後ではあるけれど元來が方子妃殿下の御意志にある事だから一應妃殿下の御意向を伺つて見た上で改めて何れに決定しやうと云ふ事に評議一決早速妃殿下の御内意を伺ふに曰く

大正十一年四月二十四日（月曜日）　京城日報　第五千百六十七號（第三種郵便物認可）

關東州と馬券令

遲くも五月中旬迄には發表の筈

【大連】關東廳にては種子島西の政長官を中心として馬券令を公布し馬券の發行を民間に許可する計畫を進め昨年内務部長時代に建て昨年内務部長時代に於ては公布をなすべく準備を進めつゝあるも五月中旬頃迄には發表せらるべく而して此の寄附金四萬九千餘圓の三萬圓の寄附中大正十一年度の寄附金四萬九千餘圓の三萬圓を以て合計八萬圓の寄附を以て馬券令の公布をなすべく選び出し地方費の負擔に於ては關東廳警察局が馬券の賣上げ金の中より支出する事に決定し其の他の寄附金は現在の有力者に呼掛け募集と共に馬券令の公布と同時に寄附を募集し其の他の寄附

夜明前

室津鯨太郎　守田かずえ　譜

【13】

煙る雨【七】

鈴木は猫を抱きつづける。

『其の後女もしんみりして言ふには、『其の後女もしんみりして言ふには、機合とかお茶屋で逢つて居て は、僕の方でも月末の事ではあるし、多少の金を工面して行つて見ると、母親一人居て女は元の抱主と羅漢へ行つたとの事であつた。僕は何となく思はれて居たけれども逢ふ度毎に僕の金を遣はないや引は、若し金遣ふ位なら、たならば、貯金をして置いて、何ぞ稼を自由にして下さい、そして、羅漢へ行くとは何といふ悪だらう、腹も立つて見た、けれどもまた思ひ直して見た、自分の方で金を多分働くつて充分な事してゐないから、もりで行つたんだらう、別に商売を思ひ直して女の踊つて来るのを待つた女は一日と言つて行つた稼ぎ行きが三日経つも居て踊つて来た、女は踊つて来て僕の顔を見ても何も僕も我慢が出来かねて、他て女と二人で世話に成る者は市内のどこにありますか（廣生）▲神戸の馬子が洲看んで困るといふお方へ＝なればかりはやめられません何故故でも我が馬子は鮫人でありながら年が年中一日の公休日も休まありません日曜はあつても祭祭や何そと主人の快楽のために我々まで引廻され其度に何等の娯楽も無く疲労するのみ、時後は十は夫々娯楽場かありますが、我々は奴隷的雇傭されるばかりです夜の酒で濁く其の日の労を慰めてゐるのです何とか優遇の法はないでせうか（龍山の馬子）▲勝敗答見の種法題を大阪に注文しました間題で四ケ月分も来ましたが同種で苦しむ方にお分けしたいとこざいます（優性の方で金快した方に三四人もありお解答も一ケ月分二冊六十銭で御座います（新潟市百合）▲私は龍山の親族に厄介になつて居る者ですが銀行か会社の小使員にお世話下さいませんでせう（二十二、の女）

▲本紙二丁目の切り抜き「煙る雨」に出てくるもやん除り面白くもない三味の音を側から引き抜いた場所掃チ

▲大勇（創刊號）　謂道館の同志が多年柔道の研究によつて體得した精力の最善活用の原理を簡明に社會に貢獻せんとし謂消極文化會を設立したが本誌は此の趣旨宣傳機関として創刊された者である。醫育、精神修養其他生活改善社會國家に關聯せる諸問題に就て名士が執筆してゐる五十錢東京小石川区大塚坂下町謂道館

▲光明最勝王經　体世間の人が病気と云へば一に薬、二にも薬と無暗に薬を服みたがる傾向がある、病気に成た時は早く病気に成る前に薬を服む事が肝要である、病気に成た時は一日も早く治療を受けて薬を服む事も肝要である、一向効果の現はれない病気でも一向効果の現はれない病気が往々ある、癒不治の病でも癒しる現に若しも居る人が何人あるか知れぬ、人間が老衰したり種々な病気に取付かれたりするのは、聖人体の細胞が其生活力を衰退して病毒に侵されて来るからである、体内の各細胞が充分に活力を有つて居れば病毒は侵入する事は出来ない、病毒に侵されたならば、老衰とか、最近よく言ふ生活力に依て何時迄も健かで居られるのである。

▲蝶蝶世界（五月號）　扇橋の散切り屋盛動　金島の鍵が破り、南陵の鍵を開き、明朝お洞、馬琴の土手の女等の説明軍おしゃべり　（向白の鍵）

▲慶應義塾大学部　（三田）　（三田の銘菓お松、圓玉の白玉